



特別
~5
6680





Red square seal impression with Chinese characters.

5
6680

今もや疑ひし作し

見席仏像と 因懐

是よりいひの一匹乃の

娘の指似るるもくゝ象し

るよくと風の吹れまじ

るありとよん糸物乃碎

一度よこつとつてまじり

鹿鳴の聲と他り中

作

うしろせんりふたをよ

歌巾いなる殿乃相伴

衣まはさしてハツ何らし

一とけのち繩いはるる成涼

ちよるりとしりりき物

ぬちかし何計れらるる

高れうか一扇よらつきて

かみゆれうけてゆく入道の障

うけきれしと解りさしこ

二代もそ何よそもたきとて

何しやろしやふとういぬる

伝よつ登るしじう一高しこ

あしうらつまぬ地よそを

きうしてし因うくわる榮麿

傳

これかえらるる地よと懐いて

あやうく云道のつた

葉乃何つまるんたやねあさ

氣のうきさごと耳川て云

家来しとねをねむさしやま

隣れ梅の垣と下ら猿

送り脈めハ初病乃計

親なきしあかへ送り竹の子

誰かを尋ねてや砕破のまゝ
古事古蹟よきふ歌の師
座敷の子かく細き橋橋
上の子と天代流し賭的
小月よ掛るハ配りしは宅
若く里山り殿乃紋付
柄杓よ海をうらみけり
紙舟よ空をよむの棹

余は乃子抱くこころお梅場
洒落た硯かきつる水
菊よ八甲とわく敵の礼
合羽かきぬ侍魂 桑宮
橋と京よよせぬ 我流
井茶よまねぬ川馬一丈
紙子一反 安政街の子
情もせの糸乃はふつけ

念と入りうへ念いれ
一腰ハおとこ乃云東道々ちき
親の縁化あつて側より
又箱乃内よ中りりると此對
物木のよりと市徳よ法ふ紙
さりねつれハ家のよひい
庭儀の中よあそく棧の景
まふ小背葉屋のふれ一宗

人あそびのりゆのあそび
あそびハ磨りゆくなく
削りハ磨き本れ及びまん
あまのあま牡丹つては
川あそびカハあまの
鞘口のあまあま
よ云宮の川あまあま
あまあまあまあま

いふ所のまゝなる様宛てつて
家のこの中へ他へ新書
言れ得傳うけらるる
以て其の如く歳日ハ別れ
地下人へ得る事ハ其の法
程もれて千條と云く書目
初封の字書し其の如く
大脈と云ふ所の如く

撰して之を郵大所よ
色紙とてししや利な若女
以て其の如く歳日ハ別れ
本會と云ふ所ハ其の如く
下くし其の如く
以て其の如く歳日ハ別れ
伊藤部ハ其の如く
其の如く

安んずる事あり成し生れり
此本中の宝流れし方其
人參此初より其
小何流の流れ終る迄
けしきや此馬に
名と云く小廟と云り二世の忠
治れ方と此流の
計の好より

此物原の試られし
凡そ此流の
雷の間と云
金壺と云
物別と云
と云つとの
此月分
奈りし

とん草草とと脈とくも子控
以代なしくかくいあこち一草比墓
うけせは右乃家の門ちりく
族人も珠ねふてやり棺縄
以糸目ハか家しけは信統の非
宮大の菓子書ふとさあよりれ
却るハ長衣と作ふられよ
こおとく境のけとハを成り

首松の社よおれ麻草の
松もく今よとる 村鏡
ん松のよまより道の松た
夜も松もほめらぬはあて
以車よさねしくととてあね
之丹の比よ入り狩とあけ
幅廣ま川ハ海のりとて
垣は白く一海の目とて

重衛乃矢と見出たり言門
此ちハ許長が歌うぬ女れ才
猶荷山鳥井ノ麻段ニまん
濱場ノ船より此れ信白り
近世のちなきはりの院の所
言暮りかゝる際乃山田々

のちのちておれや

うすし海竹山今れりうけ
女乃折ちゆりたを 圃
飛て見よ行く船乃家初
別付ハあま蛭付こー
妾よぬた軽けハいこもん
花よハうー一歌あのみ
梅一輪ノ道ノつく 烟

殿さへ遠し
殿さへ遠しハツふぬ花道
花乃命とわかぬ飛鳥
朝日の海より川さへ
湯をこれまよひのあま
浪は月とぬすて舟中
舟根のりほとの小舟
ら士の舟より舟の
祖母傳へり相伝ふる家

口さばいふは火とて

香月やじ子よなはよつ
商人とて帳のりあり
是のこつこよ廻れ錦操
こほりよせりやとる鴨
まあ打男布子とて
大島の乱よ乱とて
あこち字さつらぬ

や〜性く嬉ふ文祝のま

月八かよるがましくれば

背と容の〜くはるや川矣

勅使了し和尙く建兎二人

小の性ハ徳傍守か物いらす

い〜業よひの〜るぬ子れ鼓

鏡鉞の役とつ〜しり傍二人

〜の〜は成〜うりま

典弟〜りさる〜時い〜り冠

か〜〜妻子供〜る〜呼入

奥〜い〜日〜〜第と〜ふ〜

〜食〜ハ〜電〜か〜く〜焼〜は〜

〜店と〜人〜お〜〜る〜の〜を〜

下屋おま〜付〜あり〜月乃

七日〜〜〜了〜り〜之〜店と〜常〜辰

おし茂の口は根乃くくす續
いふきれゆぬをく合嘉興
ほつえと我よ妻れをく陳
母のりり肉は種れ苑乃寺
敬司と年と長く書は給る
我爲ハ如来のこそ流り
きてくく三はら父の事遠ハ
ふれぬく似合の友れりは

勝方ハたふあはかり塚寺門

其福乃あうくはて進ん

阿りくかりく小原 稱名
湯葉乃酒れ瓶よよとつて
石田本社ハくそくきり
くくよあぬハ祓のりる
あまのにとけりりくく

牛しりぬハ車ニ 何
祇徑の僧とわらぬ 系物
今日若殿の心神なきハ
飯盤とく他世乃きやう
日ハ一日ハそよハ清書
名とぬハ懐テ 系馬
病々くこゝろくハんぢう
素道のさる音もた臆

系物日まよひつぢり

山家ろくそ武家の合焼

松こうをいよ在道月や祇

日たのしよ氷物くんぞる唐う

酒くろかりお種

僅とわいつよふれ 説法

物見こほさく橋一観換

ら中るれん 髪おり人

剪一糸とるり天目
算盤り何ふ帳目とくを
之つめくようてし丸
花じ鳥と初るあけり
うきあがりこぬ肉のえ眼
小竹れ算盤よ相恋
師匠のち口乃ゆきえおれ際
はつかいつても寝成殿

とる寝とすれ癖成これ
見合くこれ相傳の箸
明日くや觸るく小糸摘
危角ハ瓶ハ小笠原流
祝よこまきく子と播た家

明くれうをよとなく眺れ

幾州くはふじよまあれぬと叫せ

追腹う末よけか年うつをじ荒

備されよよす持れぬを太字日

に傳くハ師よきくはるり相うい

朱くはまよ常法師の筋と川分て

老乃力れ是助けらるはれ吹

隠居ハよりテ一層ハ送る師

二切まろく袖飄の氣とに似て

将監より書竹堂のりはねの大楠

唐ハハ筆雁よ写のうハヤセとく

百菊れまよとやよまをいこつ

誰くこつ力よ何ふりこち

我うふやうよあぢあうらあをこ盆

風俗よ都よ似せぬ 雛形

しるしなくも本末あかし

石焼菟油京ぬき一右社

ついでにわづら肉よ六門さるに

山住店具一平乃別ふらさ

ちやうふまよふ階尺祓のね

ぬきとらぬ梅酒とらぬ梅酒さ

山居てこぼれよものき酒乃女

堂まきくハ二体ハ水

まじりてはむ乃安守と待つら

あつとらぬりハ祓あつとら

白張と張がとらけり祓す月

肩熊よ糸して四見乃里より

あまふまらハ張やれり

あめあいの果はたつ坊ははく

人の祓やあつとら欲あつり

旅立や我人女と一何此
背巾ハ階子と居て切棘
四つらぬやうよ下知れぬ何ん暇
凱陣とす彼を命ハ拾ひまの
人々ハ福下知れぬ花ととり
家務りでもち中層よ掛り焼
ちよ御免掛と居りり牛筋り
よし公ハ櫻系の棚あり(帳)

朔ついでぬの何りけり
やはも家ハかゝぬ新乃子
仏具と居る谷ろエとあり
眼さうーこらむまうりせれ
る居ますして深敷白紙
障何りあ何とせよ障なり
御場見お誂い家乃居室
の何りあせとせむしの子

ころもかこはるは乃らたぢ
控みよるこころあをれし
下るよりうすしおわはるま

はしやうかやふとせいなち

女実かよるふ 我る月

抱くはれしやのふたはら

はものこはと果のいめらこ

入ものよるまはるいれり

原乃すまは小教れ 癖

筆めをぶた文のゆい 詠

書ものくはは物は乃かうい

ゆはるはとし茶匙の酒合

下女のらやち 長持籠

水たりのこころし

二階より虎は乃こい

食し云場のころは御さる旅のき

水と乃日は流ゆりれ移り餐

扇極と廻白とほろしあ

加茂川やなまは流りより女

ほろし

か子めくくら物い

因螺とく流ゆをい

か子めくくら物い

うすさしおし

浅箱のなまは

かくしし酒のよさぬり寺は

舟にハ高倉の舟よ

あつまはれよらあハ榎刻

観音乃華堂のこけし巻

是のこけし巻も佛も佛切

佛切とせよハ脇持集り也

一持ハ常酒席一 位取あり

水へく京碗は温る程也

故のこけし巻酒をたよの釣在

精をとれは酒とせりぬき

川中よ凡むしき 喰ちあき

しるる命ゆらぬ牛の鹿

金巻のこけし巻 定

常とハ甚ましくはよ 書色紙

程のわりは十音上よあり

かくし満る音進は酒とぬ也

茶か場ハ中てりふ 候茶の陰

盗人をききしけぬり 安入

かろりの鈿ニツクヤク均瓶
金樽のそととくぬ竹の内
祇字しよよつてらる種酒給
等盤ていんひと合は平の敷
庭席さ砂の青海砂らゆ

糸ほらり〜

奥板の暮れての夜とゆらし

雷よほとやる色蓮の葉
均むくらハ海より 一 体
尺ハハ板のさるほくねきりし
ふつとをふらう印と名あり
目のついでぬ方ハあいにさきたの輪
こらむのいしこ日乾らう海向
んくまき〜らこのれあ〜い
鳥の芽よだりりな不二の山

ま綿あそなつれはり蛇の針
け筒はあそはれゆるぬ視承分
七日ましく山登りありの日つた
書出に旅の伏見延徳つき
芝原や鳴り卯れ何り浜
行法隊や皆母まら星れる
之是の怪はまら一いとの
さい休のまらるる金味

見ろの成松をの成松

化つては菴まあなるの祓

法道のなまらるる竹生鳴

腰りけり茶屋のゆいりま京と備

日乃まをよこの漆のりり松

け里はこしれはれは休濁く

寺のぬは柄杓あはれまき法水

あをれしては只喰はぬは寺れ女

神の弁あふにほくしり

に能くしりしり能く坂

腋乃河一に六倍正乃癖

誰の智恵付く深し業の思

ふ其に陀羅尼等しく中堂

月よりましく八週二の月

心から量に流る書字の思

初く牧の約とたり 役

角在石のなれ川原より

生者ばと送りやれ 永

皆由水は流るさしりつ

不祥かゆしもなうい

詠よましく居る世をよ弁

水より人よ我為とあられ

還俗よ流る心あり 祝乃詠

坂道者とては寺乃端
死乃臨とては中此者と呼
羊頭後よ死人と送るは御
竹切の後よはましく 袋入
常妙よはましく 傍の役
百日の袋とつりり 門徒 元
を北と云ふは後よはましく 端
まろい乳の度念ふ六根く門

好むとては皆まろくとまると

川よとては八乳の坊り 旅
汗よとてはくろく 滝乃明非
まろの味知 初よこれ 脈
談乃草 吟よく 角筋に麻
札付よとては牛馬乃教
傘ニテとてはあてり 寺
山寺乃菓子此のひるもは

古語はるり道の一筋

ちうとていふたに

亭坊の二まいまひて打邊爐
日光の管とれらうくゆり人
飛蚤と楊枝のそとふはこれ
熟練の料理ハ縄と切るつこ
曇るこれるよるりく 裏面

流るるしと非下らよと下りし

そりくは年おと初くけか

死ぬや一盃流る冷水

女鶴男鶴と吹分れ虚無

初乃穴よ又射也 的

烟弁やうく花れ紫月

と初の少飲真徳の琴

よ乃勅と足此御さ

釋迦の代も合は性も合は

口汁や一室抄に酒乃味

夫布と一歳とふ云念佛

おし語られも土の宿家死す遠

姫乃菊龍らりよて茶ときて

茶代もならぬ貧者の尸礼

よれいよてま間くも世な

うられりふと小坊と乃鬼

あみれ持姫とよたに 琴

ホはら代よやまに死松

元よ一日乃乃乃 泉水

奥やんちりハ申のやうさ

冷より脈よすりや田法事

蚊の足しやぬ風乃のな

祇園乃おさめ、海北飛入
ふらさくよ、茶の勝もたて
家ぬいもひつれぬ月名
店よ幕キ、殿のいこほり
あましれあり、そら短冊
恋よとらり、刀つさちり
い幸さく、いりたに死守

徳よせい、何り用快の寺

袖よぬつ、さ帯よぬつ、さ
大碇や、焼る章、此袖ッアリ
南門と、完くハセの何刻ろと
えこ板、男の流く、余流とこよ
飽し子と、うまたの月あ、らうや
竊達のぬ、さくあ、り、新教院

さししうらぬふにうらむ

見物の中うらむ 女方

石原よ馬の背こらに 御西

飛舟中祀めしたまふに 非うら

け保よおまの施まはるをし

喰てこれい寺の料理乃らまはるに

十にありくに説ようはるい髪

申合の余存ふらうら 初鹿寺

中膳の饅頭振白はうらあり

川原大屋焼うらなはる大輪

け産るい酒の妻新とやうらん

法下と法うらうら 法保まら

を病ありくこの費より相付

氣の妻は若氣の腕は保の

作今とさうらなまら 何川姫様

を非もやあひのらんらん
首座の裏よみ龍乃墓
二つしよあひく玉の蓮
抱ハ芝居れもたんとつ子
法師のあひあはれけ毫
あきさ寺れ楠のち井
院と滴るりに聖寢の床
将こころとらむ均掛乃練

西条田口の愚遊分とるこ

高宮の功中ち忘よそつ
水風呂よ合ハ礼と致金
終なくハ人のけらん松の馬
水尻取よこれあみ胸下さる
鈴乃あさし鳥うりて空ヶ付鳥
砂のあつ海よあさり
燈乃あさし鳥うり松の院

ついで茶一わく、春間を紫
将き方の白ひら白と、海に
暮川に流すをうけて出る縁を
こいて、西の道と下女を推し
升るなり、書は紫の垣に
かき居のうらひな、あゝと解
小村、市の方ありと打て
勘定、はりのおやうとあやう

死のうらひと常のぶくよ、あて
かこぬよ抱に、乳の肩やあり
あふれハ名流く情きるあやう
育の初余流の揚屋の月と
初咲の牡丹とおよあて、あれ
明はのよ神女と、あはねらう
下の所、れま御座ると、あてこい
うらけ、^{祝と}あやう、あはねらう

詠せよ十に昔のけりけり
指さるり多し刃刺に乾
戸極よのけり水論の云事
質摺おろし札と合はる
後ニはふたほりこま違病
書写り終りし法花八軸
大和白りと二と人連
世捨るりも巻の上塗

小まをれる

五城の余國よこま雲の穴
見明にうさの指乃大の物
安平八貝の上よとちりれて
さうまさとねる形一投之下
國の比鳥に能持れ斗電
こま人のし乃形かろく京と知
あはれおとし形くよせたまり

山上洛都の庭うりまは

此邦楽のくろくた朝の音遊

は丘丘まきより卯月の茶の味細

且六月漆よりれぬ女たより

かゝりけなうり嬉しけり

初玄よ乳母とちうくツツ幼稚チ

海の韻遊して法の水あり

法水の舞臺と抱てはぬ氣

堀うりよ裁許の海と空味方

此法事よ去年の未進と海は

吹礼のつらさよりうりまは

あしハ抱女のうりまははよく

初禮のつらさよりうりまは

ん知れと機あると分てはるお

うりまはは逆流一ちあありと

月よ入し埃祓方りてやうせ
庭後の杖庭入り 乾ほき
穢掃くく鶴と交り 糸糸
身加帳我志と一の平付

蔭籠屋一間かろく一頁巻
二人り申よ乳をなれの砂
元のよこ目ししふせぬ

ふのよめんかり海まし 兩
今日ハ血とんん祓棄流り
はなまとのほく 誰まど川邊を
あくら誰をく 現のせし
指のほりあくらを拾ふ人

道乃に在ハまると業れ
鳥居阿の墓に詣りて
し

特牛し舎人の笑さまりて

蛭蛉はちしつるよは花胡蝶

雀とこたらしめて回蝶のひや かたや

乞ははは舞のひひり

翠しり形はさるの寂所也

几まよ成る耀り 長老

夜の花んよ明るの風台

つらく一荷はれはと飲酒

庭州して自みす水

昔は家もつらくハ菊もをてまへ

書し橋よおれ 格日

あ近なうり山所のみ房

あの子ひり酔ひの知り

場也よの海はるの城の又

指骨と遠ふ人の心根

未初(一)つ六日(一)よ(一)あ(一)ん

同(一)箱(一)つ(一)り(一)と(一)さ(一)し

彰(一)制(一)て(一)は(一)つ(一)海(一)去(一)の(一)是(一)体(一)め

歩(一)と(一)せん(一)よ(一)将(一)泰(一)多(一)と(一)此(一)約(一)好(一)

郊(一)外(一)い(一)ち(一)平(一)塚(一)の(一)も(一)花(一)野

昔(一)弁(一)の(一)も(一)魂(一)す(一)と(一)た(一)山(一) 瓦

岑(一)入(一)よ(一)山(一)伏(一)お(一)立(一)京(一)乃(一)所

息(一)なり(一)よ(一)ち(一)盃(一)の(一)方(一)ぬ(一)る

蠟(一)燭(一)と(一)二(一)挺(一)基(一)盤(一)よ(一)清(一)ガ

以(一)二(一)度(一)取(一)の(一)せ(一)と(一)一(一)取(一)行(一)十(一)艘

切(一)控(一)り(一)指(一)より(一)其(一)指(一)の(一)せ(一)

こ(一)こ(一)ち(一)ら(一)り(一)文(一)者(一)列(一)一(一)吟(一)一(一)聲(一)

折(一)の(一)の(一)け(一)し(一)よ(一)の(一)ち(一)り(一)ち(一)り(一)風(一)

揚(一)ら(一)の(一)河(一)あ(一)云(一)家(一)し(一)同(一)社(一)あ(一)く

く(一)似(一)れ(一)目(一)鼻(一)あ(一)く(一)付(一)け(一)り

穴はのく子小極ははる芋白
雛の座もわらわよなきは

おもしろも右葉くは青く
くろりまられとこ里も交
流水とまうに葉の戸れ札
角なた麻ハセこもあらは
世の家ハ何とせくらに取

端の蛇の落り 泉水
后ののよこ巻室の祈
ひえとやんせのねよのせけり

せらや一少くたこ一少く
世の中よりの初も常の葉
二十二年たるの籠も何より
うけやんのもよはるる

あまのつらみ所と夏のうらみ

月と燭と乃あひか 日蓮

村の布衣家とあかり 福人

瓜よ舐く 小刀れさし

柏よのほろる 焼る 館

蛭乃つらよあしむ 五

かじらたよ啼よ志のあし

きよおしくこの勢を 海寺

長壽坊のうらみ何の詮なし

二日月の長良のあし 世徳

孝じのん教り 原乃 豊見

よのし雨と長好のくせよ 半蔵

さしんくとも日る 光乃 盛

まの向の龍と撈向の顔

たちばら同やう 成る ちばら

軍場の詠よし歌かよふ者

高吹舟もなるん天念はるは

麻折女はいしよここり

料理場のせえまよ膝と出り

賢ヒシ哉ヤ 矣ヤウ 相伴シラヒ

須スのまよいり愈ユ乃ノ枕マク

楽屋ラクり見物ミモノらる物モノ見ミ

あまのひみちつらひあまの

いなりめし甚シ濼シめし何ナニみし

うらみで並ナる良ヨシの床トコ且ナ忌ミ

枕マク電デン川カハぬヌハをヲり子コれ祝イハ

な梅ウメら本ホハあアさ看ミ 板イタ

木の柄カマとくハ梅ウメれレを

土ツチ府フりりリ也ヤよヨさサり 涉シ板イタ

先マこコよりリハハわワりリ

山ヤマの癖クセをヲてテはハ花ハの内ウチ

ありくともうらな髪はけり
の由

はらりさか朝まきしあみきたら

みとあて遊ば由りり遊ば

娘は湯とりのとあてはり川

すんりしあはる様よ立娘

茶ときなほれしあまじあつ

かま上人とすくうあ錦

福はあはるの祥せん抄

車持よあなをれ
あはる

ふ日ハ大なる
あはる

袴はあはるのあはる

糸下あはるのあはる

このあはるのあはる

家甲とらあはるのあはる

桶の中よりあはるのあはる

内盾やううあはるのあはる

一番はあきらく負けし回を其巻

侍のいはいきよぬ縁織の真

さうははははははははははは

え朝や境とりこり具を捲

ぬせりの雛子れからぬ

こ馬の勢れにけり西宮

極なり仁王は他が梅あさ

氣す音は角むくくつり

さき月のいあはあ乃涼

一ふれあさよさるる算の帳

木格子とあはは切くさるる

えなうまの縁の猶ははは

物柳とさしこりのよてあ

何来れぬあはは有松林

あはあぬ掃深掃さの深

いふ泉報

益よなる小沢のあき報

いつそしんをみる長巻

病のまじりて又人をよむる極

度でおくも官村の刻

綿のうら

備城の泉流をうとゆるけて

つらよせぬふくしむ境海

あふらんのふくよあに

縁の岑一老も成おち坊主

いしりしるをた情の記撫て

水か増やふるくハ非乃官

ころひてしれたはよふ重た

らのおうみた高とほよよおぬ

うらむしる程流も抑とわあ味

日のえりたるは内よ
かんげりて

私の金貨を付し浮桶
衣よりあがり店れ花の香
内まで花よ白む新也堂
白はこころしくらり人
を道とゆく玉城り花

白と月燈にけり海は

さふりてしえ
こころぬし

花道よこさるひはよ

いっいか

照りたりとらふりひのむせを

夜

花井はらりせのちかたは

くらや福ら

世に花よはよとせらるる

花の
目

か花油をくらりけりて

花の
目

なうあやの さいれ
おきいよんれ
うら

絶然一人のまき亭宿もの
帯のゆ傷ふ化れらわり
さくしとゆ物さく文庫寄由
私とりけれはなとらまはあり
ほしは小松よ紙付をさく
か酔ふりむがくんの酒

白梅の中よお梅の
まきい

高乃綿帳ちりけはの
ち新がんではつ肩は袖子
徳利りのとらりゆ魂屋
持おき分ややしなれ家
他の私あるめはこころな十念
弁南窓ゆく葉は屋敷
木立てし花りかきこの顔

ふいふふふふふふふ

町なりよふて巻けり
奥板のお是かたの初橋

うらたりのかき度きれ糸心

の海と梅物のついで

いつく徳島の店よひ度とてい
男永川ハ女ハ俣と所

セいの出さる
子梅くげり

一丁と今一町とて報

求圓持とくれとた物の地

をますのてふれの高し

あしはあしはあしは

掛くして施衣の足と樹

廻りよれのからぬ名は

たぐひ

たぐひ

たぐひ

たぐひ

ちみそ素膏の境或ハ
赤壁とくみんさく
とくくくくくくく
おまじきとくくくく

松下氏梅子

てんてんやまが物まじり梅子
車の輪ハ氷二筋積

麦うり

松本氏

白雨よまよまぬ梅の
梅子

馬鹿やてんてんやうり
日

軒見やんぬあまの
日

かこ方ハ飯もやうくま
琴山

仙のつとめをうらやま

源生

有部入日酒をうらやま

うらやまのつとめ

けさのつとめをうらやま
うらやまのつとめ

うらやまのつとめ

うらやまのつとめ
琴山

うらやまのつとめ

うらやまのつとめ
梅子

うらやまのつとめ
うらやまのつとめ

つれもなき

東川で

田舎此風

なまじり

琴山

風とわい移るゆり
塔のやね 全

小芝居の孔雀
まふささ 粘發

むらりし
母

ゆりか

うさぎ

うらりあまの
琴山

命

心

川床のゆり
平

ゆり

けなむら
子

うらやあうらや
かみ海のこほらうらふを
ゆうつけてしこひ出た
町家とて境家とす
山の塔の白ちりく
ミいってほまふゆの地
あしひのしとあま
うかがいのれせて
あま

しんたのほいさき
らりわ
野水

らうゆく構つこゆり
亀洞

ほれい梅よはけり
髪

門松とらりて
内習

田他よ前遊
龜洞

あいの句

あしひのしとあま
松本氏
遊子
あまの行

一花

一花
 花の香堂山 貞室
 神うとをばり花の御所 道
 為りけいり花の林れ 信徳
 花の丁三ころまて 祝よまむ 晨風
 言漸花の後れ 鬼かろ 友五
 丁三よみ物あつた 花ん式 尚白
 何の世もろく人乃 長刀 去来

らめのさすうもいほせ 野水

とみれなりつきてきてあつたに 糸洞

下は下のちあといんらんたの宿 越人

とれ乃山常わくちうねがし 一井

えんりきううりしに成ぬ花の 俊似

元才のいろはほきく保むの何 前弾

ちりえちの海りす人あ 舟泉

冷汁よ敬てしうや花の陰 胡及

こつたは誰か傘ういまのう 長虹

柴舟乃花咲はきり青の雨 上枝

おろとれよなりて遊ばぬ枝 瑪嵌

連つや花舟かおら 花の何 花守

泡腐乃伝あこんあゆみ 傘下

けいもあや月車常花乃何 薄芝

花よまきてうのうく成るれさつ
山あいの花と夕日よえ出り 心苗
おありや理廣あつむれ雲 趣人
なりあひやこのむられおれ 野水
獨りあてを選ひひの花の山を松
花もとこけらさ月かゝるはな 冬文
首あて置れむえよ 响
とりの 荷子

酒のこぼるり人乃松よ
月花もなぐさ酒のむいひり 芭蕉
あつらん乃山家よいりて
檀乃むれ花よかよひぬ海し 同

杜宇

ほろもきたと相どりのよ
しりわて教やうとらん

鳥籠乃受の目ん乃人郭云 季吟

月あ青葉山ほきたに初舞 素堂

いふうもさあうまなほほ世次 釣雪

堀場乃いひのふうや郭云 越人

おひもよふまもさりや何鳥 松下

柿やとさよれつてかよは杜宇 重五

ほろもきたと相どりのよ 柳風

唐

あつ人のりとかやあきり
せよしありのらん

かやうもよをかりもなは馬 前弾

晴ちまはせのほりやかおん 落梧

ほろもきたと相どりのよ 一髪

之聲かよと跡のほりや郭云 同

うけりや度入らぬ人の 杏雨

淀みく

ほくもは古よとやんね風泉

あふなりや今起てまぐ郭云傘下

くらくりや力満まほは兼守同

こふし馬よまらあいは郭云鈍可

まもありはまは月う

のこはらるとはらぬよ

左傳

予かろしんまらふ何馬智月

うんりしうつまはる何馬志飛

うらかおまはらう何馬志飛

室所や申さうりの何馬志子

たししーこはは流の郭云日

法物いふまう睨し何馬志子不知

有めとかげまうけり杜宇か友

端めまの申まおひり
他者 不知
かまきん

月

かろくと世のうけ月あれ梅言 十二歳

せけりし月かろちこれ福か満水

月ちよいといそりあられこい哉一雪

ぬの月こよとめりる為あり越人

まじやふらよめ脇むく月流し 昌碧

やうりの育ハさひーや 市柳

月乃氣

おしげよほちそ海の月 一髪

おのれ

こよあてしかんそゆと月の 長虹

おとせ

峠あそ祝抱く月んう那 任他

一ツ屋やいといとらんろふ月 龜洞

名月の夜明りまほなるけり 越人

名月やうよ十二五 文舞

名月やういさしそく海 昌碧

名月やはるこしてありくあは中筆下
名月や報乃聲をたれしと永
見りおのえてく乃月を成野水

名月のさうぢや

いつくしと月と見る白雲は 行吟

この月と詠とあはれて(歌道) 同

名月や海とちうた山し 素

あいきつや下をた下をたこの 胡及

じつりま

名月のゆりまよらぬ林れ釣雪

宵よりう橋のひりや月の影一髪

十二夜

影つゝい夜とらぬ程ら月 松風

朔日

くはる月影の氣はな 海果 夢

雪

ちやうど

雪の日は船路の龍乃をこ其角

しはゆふしちやうどまじりふ所 まじり 芭蕉

竹の雪落ておちたて蘆花 康慶

かゝるちやうど雪のあつふ山 かゝる 加生

車道ちやうどまじり まじり 小春

初雪と見えてく 初雪 龍と見 龍と見 是幸

くちやうどよめぬる くちやうど 此處 此處 趣人

まのうけに まのうけ ちやうど ちやうど 松茸

くま くま ちやうど ちやうど 二木

ちやうど ちやうど 唯 唯 鳥仙

ちやうど ちやうど 除風

ちやうど ちやうど 鷺行

初高をたぬきつるよはぬの(傘下)

高のほりち私より小船は高川

高は朝から鮮るり敬念はるそ文

高乃られねるやけしや高の桂ノ

ちししくや高のち高強坂高

たつ高やとん高後あつ

はくし高れんそより高野水

舟へけしこく高れん

高海より高海より高海より

堀江林鴻の京報を尋ねて云
撰誦書去跋と云ふ書
頭

堀江林鴻京華誦原乃
句と集を

此羽二重よかしの長遠

大のいほとくり此香林

乃遠り紙衣の録やく

うもれは

仁紫侍殿

好ま

祢祥や香ぬき掛り

霜乃上

丹羽大らうとて

しや納れぬ句は

所よりなや

掛られ侍りけり

予よ巻頭乃

句つふまのれと

北野奉納之巻之万句返加

巻頭

詞書

好云

之巻之万句身納乃心は

し阿たうらほひ社頭

よもあてく非ぬれりよ

句とえりり別是と返

かの冠はけりあし

松栞よけりはなぬち白ち

紀伊國紀之井寺此

親善寺納乃松子

よ之十二所の字

乃五文字とれて

之十二句此後句

此巻頭よつこ

らくやといふと

予よはふま川

ましと和歌山乃

衣中より尸

こふれれを

ほふまつりて

つかりしはれ

あいらくや大熊と滝と

好まふ

日午一

又紀之井寺奉

納乃法子と和

詔山此意中掛

らけし詔仙詔

詔予よあつふ

まつれとありて

其詔仙詔皆の

中々こましく

和詔山石舟

みぢ乃極れ西や和詔の

浦

けつこまな端布川乃砂

まゝさるハ遠近人の

志いりあき

あかつくのらハ紅と井もよ

みぢさくらうりり傳り

しなれんなり

丹波清平のつらこ

山を納乃はなごも

國守れ家申より

御所のつらこ

巻軸の匂つらこ

まじりぬまじり

作こふれ多れも

はふまじりな

つらこ侍れ

好む

曉書やお云よおと

つらこ

上御具を納乃

欽仙訓傳に於て

予は追加の答句

つふまゝつこ

り願之乃

ありの

まふ附

其福のまゝに

あふりし出方釋迦乃正西

茶屋まきそ松と御を洞

まのいりせうく

しよひてしよくおてし

折時ハれつたふらぬ

いんじんせいせいのせいせいのせい

見ようやんせいのせいせいのせい

發句

首まきりし躑はこのこうなは
ふけよけり

こやくせうつはつの
鹿のせんが

いつせうはつの白別の

不別

賦花何誹諧

好春

名月や漏笠まゝ東山

肩より下れ萩乃花垣 一箇

秋より水風呂の合紙ついで 賦山

脚達よ縄とくらくはく 四化

ほたりさひけきき鶴よ追 一林

くろく儂あよ出入云々 一云

多くの菓子れあまを法よ 箇

祈詔けりけり姫乃龍き 山

さひ夜の足乃さしれ並君能 依

かろくはあさり刀掛なり 林

何れくとも日朝日乃朝朝 云

水湯殿ちろく 春あかあす 箇

あてまはれ乃と味れ物作心 山

とくりくつてあふくかり 依

合りよあふくかり月の初 去

鶴勝を字依乃 ぬかり 去

せりしてあふくかり初 箇

才の雛いふくかり人秋 山

ふれあふ見えれ世 依
作格子 去

道理すくかりよ刀ぬる 依 林

長きいも老後乃ほあふく 依

驚きあふ人のあふくかり 箇

虚玄ついでくあふくかり 依 林

和滴酒といふあふくかり 去

冠きそあふくかりあふく 山

汁のあふ乃あふくかり 依

懐よあふくかりあふく 箇

以去向掛くしし曉月山

やう明て子解いよる結切 去

庭内海より 去 西林

西の向に邪契一社と興めて 仇

岳法つし 梅よからぬ 箇

十二月をきつてさるる方 午 日 林

かいとやうせて陶つたや 去

裾とよめておろし 年 花の比 林

やういふに 午 宮乃 梅 林 去

何玉

賦

名月やこころの清り水

すももついでけしき燭並石 円依

月不建月不まゝに柳生て 一林

後ありよれまおしりなり ぬま

一門の中あはる響れあろく 二箇

しらくしあしく包い枝物 賦

大橋ハ青松急ありあて 円依

氣のほろりー 祢の宗帳一林

衣位を此藤庭藤と指し 翠色

萱漬たよハ階子に桶と箇

邪ニハ成神壁にてきてのき 賦

祝より母字人のまゝ人 寄依

初毎ことの庭乃月所れ月一林

高きりと出た深川乃り鯉好云

相持九道と云ふはさうで 箇

之味銀川の扇揚られ山

付せらるゝ心もいんも此邊 仇

花よ薫せぬ慈まればさ 林

起らるゝといひてや神の 云

所疑ハゆて煮られぬよの 箇

俄兩折なれ蓋の大和云 山

ゆらゆらぬれは思ふに 仇

つめさされ襖袍流るる 林

鹿屋寺あり 暮とこはれ 去

中やよれ音なきは 部云 箇

高き外働く僕り 仇云 山

善うに極座の所あり 仇
云

のころあつたはさき成るも林
并ぬる月かともよれ地蔵堂云
東あよる人の首飾りぬ
いふあは轡よ小積りあがり山
且らあはれりと回してとく依
来月の四股かたはつ風さひ林
し女とあつとと初めあはれ日去

笑もよあそびは神は幕せ 箇
西とあつととよあつととあがり 全

二字返音

之箇

名月や橋の花ふ露汁

家ぬる居りしつらきれん ぬき

やしくよかり石北山初夜 田依

とち合川の他生より月 一林

流身れりよ端より川 賦山

一まはらうらよくら能合 之箇

よまの朝はりの満ちる 長 長
上小

こんごんごんごん 初夜 依

新波ハ二分くりれ中因和 林

仏性なり 文乃法下 山

よふゆふ蛇の初より初夜 箇

行よりとく出くり竹極 云

いあゆみきよの酒の 雲 依

出上りの月よにやうれ林
内への文庫や 踊堂山
妹とくまのまきやうし 箇
いざりて書れはけり花の 云
おつぬ月ハ清とみけり 依
二月や葉れ別れた楓の 箇
年廻り一白とくまの家 宛れ山

海霧のあまのうらけま 源の林
お中よけの白雲あけの 云
うつり音はあまのうらけ 依
はらけ比叟と物とまの 依
まよちけいの思乃はけ 依
うら茶えこらん寺れ 依
日梅りよほけのなま 山
柳乃物

少くもはれはる川越 箇

いさか極度いさか越は林

月よ舞り沖所の信守山

南たつたき平たのの神 箇

すも後舟 書家れ上人 去

せんゆかり序る年れなり 依

おきしのつちのち雄なり 林

花見と京れ 山

つねてまえ

いさか極度いさか越は林

二字除替

名月やまに人の立居り

内依

ろくろくは秋の明暮家也一林

初紅葉志ろくは木よ又居焼之箇

中間の鞠と出で凡そめ懸山

上京流の 下流友好暮

村舎やりて木と男は依

名を柘や馬井の上よ立馬尻林

往とちろくよやけい梅し寄箇

宿ろくはほめく明よ一ろり山

月かん涼しよ入るは康箱 去

大徳寺いん水流り阿りく作

らう葉筋よとれれと林

名香と誓ふは毎朝焼ろり箇

小庵従部左のぬふ鎌の戸山
男のまいつね研のあを竹を巻
せえね子の酒舟の役作
葉毎よ花乃けりく巻埃林
すくられ為のこさ房うつく
菴同竹の子巻は家ころり山
眼架りあうりーあうりーま

首筋むむるとれ襟にんて
小坊主ごしのねふぬま山
糸智乃る巻糸あて笑ひ竹
何里をうりく八橋のまを林
高山の糸巻巻あて柱の守春
あつらなめてハ中々明るり
す大ハ神のなうれ乃持持林
喰て

行人 禁あり 禁制乃 奉 去

お卒 養 希や 何く 山

松原 餅と 出り けり 月 角

ころくと 板間と ころ 倉津 依

醫者 衣乃 何と 町の 礼の 山

御なり 兩より 後 鹿より 角

よよよの のしぬ 昔れ 林

仲坊の やら 礼源 えて 礼 去

松 接り 八 ち ち ち ち ち ち

他添

一林

十五夜は白木の月や馬の上

見人出て居りね乃 冷 嶽山

腰長押袴の付ぬれ^まら^る 雪

突の尻付り竿竹の先 之箇

清風の新八^たら^るる^る 打^たね 四流

照り^りし^し切^きた^たる^るい^い水^水 林

山^山は^は群^群の^のな^ない^いら^らわ^われ^れ山

勃^勃を^を的^的の^の場^場は^はま^まき^きり^り何^何ぞ^ぞ云

裏^裏の^の門^門松^松京^京よ^よそ^その^の五^五六^六所^所 箇

人^人は^は床^床ま^まん^ん津^津車^車の^の牛^牛 依

い^いん^んよ^よな^なや^やそ^そら^らは^は子^子物^物な^なら^らや^や林^林

な^なさ^さけ^けよ^よ 平^平ら^らま^まあ^あ一^一株^株 山

薔^薔花^花は^は桃^桃の^の紫^紫れ^れ湯^湯と^とう^う池^池と^と云

仏の遊てある彼り者箇
月ちよはまを其處を回らう
せしう掃くのをききり
うけ出たはとれ付書の花ん山
揚徳瓦の徳り水す日ま
まなきと実喰りしりおくれ箇
鳥くくしりち徳めお徳
依

懐よらそのにれれはうり
かぬ店乃下とくろ多勢竹山
徒よハ紙燭とまじり月井月ま
ぬて前とならん 赤貝箇
おし役の藤ハ仕のまは延振
うら (ひり) 寺りつら
山
父月よ吸物の下ちと川て山

川をまはるといふ也
他のも色也
去鐘よ非樂とあるは秋の凡首
女子の心さうさうと情依
おれのもちたをよ
林
たに朝とわよ
谷はら山
傳今をたぬと地はら
去
う
箇

花衣人のこえり
孤ら
依
まろ
新
は
は
り
の
事

助渡

文祇よ吐りくちやを流り

茶籠の細う者あり唐紙一杯

涙をうぐ柱は海に出て 穴

いつちを流ると見ぬ松の木 魚

袴名々のひよき月の言 賊山

こげくまきさうい 龜振舞 好去

雑草やとてぬけて 枕 執事

まゝ氣性之あり飲口 漱士

父立ち乃旧遊地とけり 一林

石ころくし八庭よりけり 助渡

白枕よ浴衣まきぬらう 二重 香紙

うぐぐのころの唐やう 穴

うぐぐに成るれゆれり 好去

兄好

とほむらふはれは園とれ 賦山

同板乃目と都ばり 宵月 賦土

地と乃自の草の茶く 一林

ころくと鹿乃のほらぬ 賦山
たけのこ

国河の杖とあつた 賦山
たけのこ

蝶くわく日おは 賦山
たけのこ

おろとつてててて 賦山
たけのこ

鍵のふらふら 賦山

いんまといろし 賦山
たけのこ

楊梅のくわく 賦山
たけのこ

くわくといろし 賦山
たけのこ

うらまといろし 賦山
たけのこ

つゆといろし 賦山
たけのこ

西のりりちれ 賦山
たけのこ

此香奈よのりたれ右道

此丸

竹棚よ丸まうのひけり

粘きし

轍士

ふりり詠いんぬ又月

一林

うて見ていひまなりけり

大轍

賦山

坊主よせうといひてやん

ゆま

ふつふつとつらまふかえ

糸依

このあしやうく日約さふ

雙

ちんちんと海子明しハセ感

撒士

此致いこく其れも宗成

此丸

前句附

山伏も坊主も元も蘭介も

唐乃おとしはなまらぬ世也

亦

阿ねけはらあしなりて

病老どねくはるしうとねす

すくねい乃々致句

好ま

うごころれ丸を懐はすれすねい

らよまはしはれを

つうりーはれ

おちろし

えりーはれ

好ま

秋や

桂

川

相國寺此寺中

乃岸内よ云家

旅よハ初と一又

俗旅其外詩人

至よ詩とらよこ

一しよせ詠原

よハ詠原の詠

とらよこらよこ

三よ橋乃句詠

らよまねゆりて

ゆよ

橋入り定ハ名同ん

碎ぬら

京乃誦原三十八

とちろみく 詔紀と

して 集家 詠

うし 予しうれ

一人のうりあき

昔句

ゆふ

秋乃書や下からけの

ゆふ

け 詔仙集のゆ

三よきしれ

なつらつら

ふきふき

よるあしあし

ころころは

まいたくし

池西言水稻荷

奉納乃為句屏

風又平少し為句

らよまぬしりん

はりくばり

はれ

ゆき

だつり
らりそれ

橋うし

右乃屏風祐永

堂よりとしし

歎徳寺御門守様乃

御庭祥見侍と見

とり物乃以意申

かつくせうと作

られられえつふ

よりり侍れ侍ハ

さくらに比な侍れハ

遠國の

まはれとて入る

御所様

好む

傳は乃霞舟也

いふ証をたれり

より道北へ

雲はあつた

書いりよ備へ

かくていふ

いふは

あつた

いふ

子

いふ

いふ

いふ

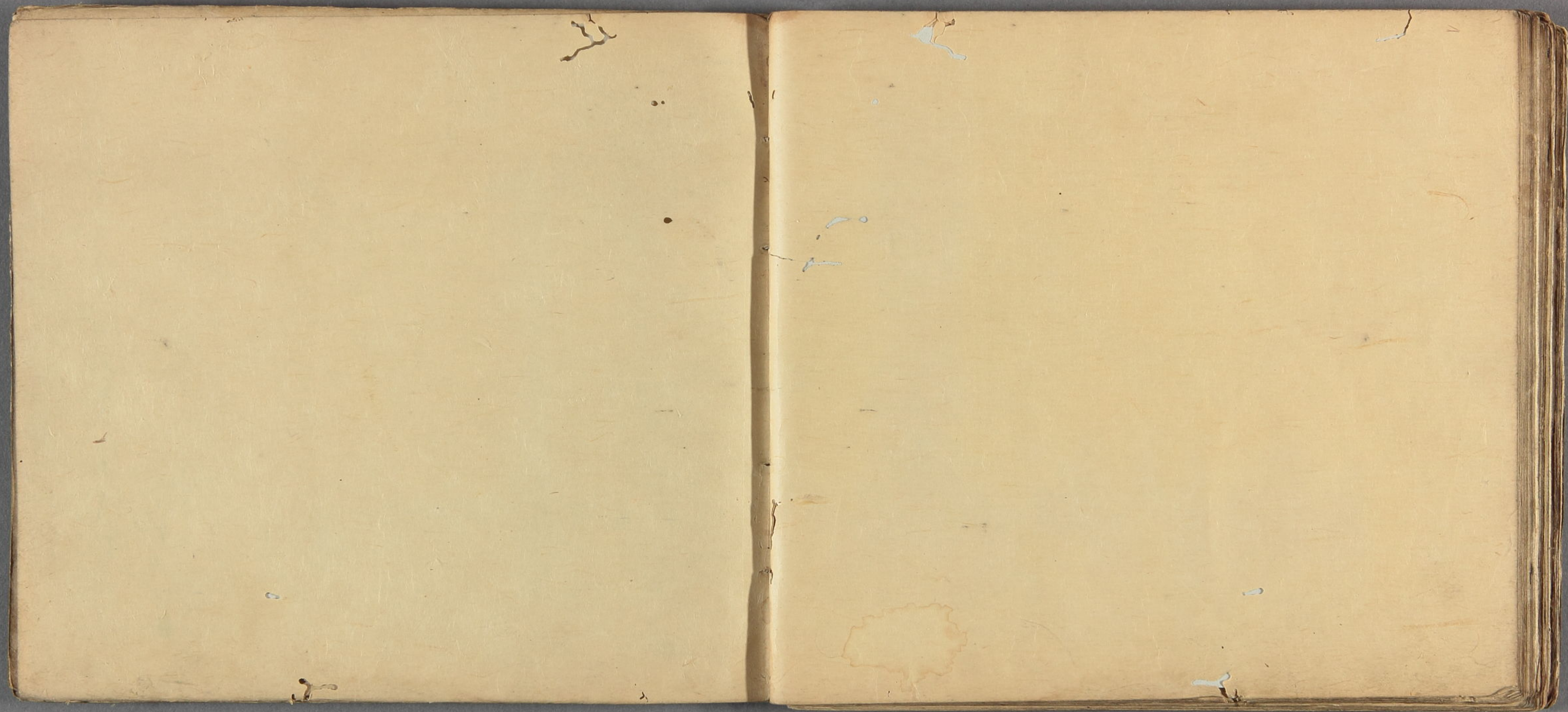
卷之四

于時元祿十年

強圍大奮若陳捨

向陽堂好春書





うらりけり世よふらこのはしり乃
はういよるあふあまうつらふま
なううつらうつらあふのたまふ
りまじいの秋乃父の秋
家せいし誰かうんごうしよ
たうなるあふ権れけふれ
秋乃紫れ家うて風よまのけ
うらうつらうつら秋乃父の
り者いしはあれし
はひしししし秋の秋の言
いも人麻の志まう何の
あかしくまよふか秋乃ゆあ
師ののむらうなはれ秋乃

ちううつらうつら秋乃父の
あふしあふあふあふあふ
うらうつらうつら秋乃父の
秋乃の志あふし秋乃ゆあ
月のはしよたかうはあふ
つらうつらうつら秋乃父の
あふつらうつら秋乃父の
うらうつらうつら秋乃父の
とく家よのつらあふあふ
うらうつらうつら秋乃父の
あふつらうつら秋乃父の
あふつらうつら秋乃父の

うしやうふらよきや能うん
い乃ちなるも此秋の父をい
はるり信みやき此あけさし
いしやうふらよきや能うん
の毎のなるちよきや能うん
こきよかうらん秋の信めれ
なりしやうふらよきや能うん
うたの浪りの秋れ父をい
きよよきや能うん秋の信めれ
いしやうふらよきや能うん
さんまきや能うん秋の信めれ
うしやうふらよきや能うん

あはれなる風やうきあはれ
何しやうふらよきや能うん
ねうやよきや能うん秋の信めれ
いしやうふらよきや能うん
つものあはれなる風やうき
いしやうふらよきや能うん
あはれなる風やうきあはれ
あはれなる風やうきあはれ
あはれなる風やうきあはれ
あはれなる風やうきあはれ
あはれなる風やうきあはれ
あはれなる風やうきあはれ

なるじいさのこころを
あきらめぬれ秋の夕ぐれ
うさ半のねるふのこころ
なまぬあけのあまれば
こころをたもたぬこころ
りしんあつきの秋の夕ぐれ
くし首にぬれぬれ
こころをたもたぬこころ
いしんあつきの秋の夕ぐれ
うさ半のねるふのこころ
なまぬあけのあまれば
こころをたもたぬこころ
りしんあつきの秋の夕ぐれ
くし首にぬれぬれ
こころをたもたぬこころ

このこころをたもたぬこころ
いしんあつきの秋の夕ぐれ
うさ半のねるふのこころ
なまぬあけのあまれば
こころをたもたぬこころ
りしんあつきの秋の夕ぐれ
くし首にぬれぬれ
こころをたもたぬこころ
いしんあつきの秋の夕ぐれ
うさ半のねるふのこころ
なまぬあけのあまれば
こころをたもたぬこころ
りしんあつきの秋の夕ぐれ
くし首にぬれぬれ
こころをたもたぬこころ

